加藤くん

笹舟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

加藤くん

【Nコード】

N2399Y

【作者名】

笹舟

【あらすじ】

はじめの一文を書きたかっただけなのかもしれない。

加藤君は加糖するかどうか葛藤していた。ホットコーヒーのカップを、額に小さなシワを寄せて、穴を開けんばかりに見つめている。テーブルの隅を、スティックシュガーを握った手が行ったり来たりする。苦いのは嫌だけど、ここで砂糖を使ったら社会人として負けだ、なんてきつと考えてるんだろう。

「こちら生チョコのケーキになります」

加藤君はふつと息をひとつ吐き、カップをずらす。ウエイトレスがその前にケーキを置く。加藤君は俯いたまま軽く会釈した。加藤君は可愛い子に弱い。

「ごゆっくりどうぞ」

ウエイトレスは少し鼻にかかった声で言い、ぴよこと頭を下げ、踵を返した。なるほど、ツボを心得ている。加藤君はまたまた微かに会釈を返す。赤いチェックのロングスカートの裾がテーブルの向こうへと消える。

「あの子、可愛いじゃない」

「敢えて、私は言う。」

「え、そうですか？」

いま気付いたかのように加藤君は言った。少し後ろを顧みる。

まったく。

私はチーズケーキの先を崩し、口に運ぶ。ふわつとした甘みがやさしく溶けた。

とうとう加藤君は砂糖を脇に押しやった。口元を引き締め、カップに口を付け、ぐいと飲む。目が合った。加藤君は堅い笑みを浮かべながら、すばやくフォークを手に取り、ケーキを頬張った。満足そうな微笑み。安堵の表情だ。

「おいしい？」

「おいしいです。佳織先輩は？」

「おいしいわよ」

二口目三口目と嬉々としてケーキを頬張る加藤君。

「本当にコーヒーによく合うわね」

加藤君は曖昧に微笑む。そして勢いよくコーヒーを呷った。すばやくまたケーキに戻る。

私はふーふー息を吹きかけてコーヒーを啜った。

私が半分くらい飲んだときには加藤君はすでにケーキとコーヒーを片付けていた。

「速いのね」

「佳織先輩が遅いんですよ」

ちよつと生意気。

「すみません」

さっきの女の子に声を掛ける。店内はそれほど賑わっていない。はい、と返事をして、彼女はすぐにこちらへ来る。ちらと加藤君が振り返る。私は軽くカップを持ち上げ

「コーヒーのおかわりお願いします」

頼んだ。

加藤君の顔が一瞬にして渋くなった。ウエイトレスは素敵な笑窪を浮かべて私のカップに、そして当然のように加藤君のカップに注いだ。

加藤君は半分泣きそうな恨めしい顔でこちらを見やる。思わず吹き出す。

「先輩、わざとでしょう」

私は笑顔で答える。

「コーヒー代、奢ってあげる」

「サービス券じゃないですか」

「明日、休んでいいよ」

「定休日です」

「可愛くないなあ」

「可愛くなくて結構です」

加藤君は結局カルピスを追加で注文した。
しょうがないから奢ってやった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2399y/>

加藤くん

2011年11月13日17時15分発行